奇麗な絹の片がどこにありましたのですかと問ねた。

「その頂邊にある絹の片は、私の結婚の晴衣の一片ですの。それから側のは、私の結婚の帶の一部ですの。皆な幸福の日の記念の品です。その頃は豐でしてね。善い良人はあるし、幸福な家庭はあるし、貧乏にならうなんて想ひませんでした」

「これはどうした布ですの」とアリスは箱の底の絹の裏に手をふれて問ねた。

「あゝそれですか、それは前から箱についてゐました。良人がそれを受取つた時からありましたから、印度絹の片なんてせう。それがどうかしてゐまして」とリード夫人はアリスがその片隅を摘んでゐるのを見て言つた。

「いゝえ、何てもありません」とアリスは答へた。「唯これが少し弛

んでゐるやうですから」

「どれ、お見せなさい」リード夫人が言つた。「弛んでゐる筈はないですが、弛んでゐたら、箱の裏をつける時に氣がつきさうなものでしたに」

「實際弛んでゐますのよ」とアリスは一層それを調べて、ピンでその片隅を摘み出した。「それからこの下に小さい紙片があります」

「まあ、さうですか」とリード夫人は目鏡をかけて、アリスの直ぐ側に椅子を引寄せた。

「その紙に何か書いてあるやうです」とアリスは箱の底から紙を引出して、リード夫人に渡した。

「これは、まあ、良人の手ですよ」とリード夫人は色のさめた文字を能く見てから、「どんな事が書いてあつて、私前に見たことがあり

ませんでした。あなた、讀んで見て下さい。あなたの目は私のよりも善いでせうから」

アリスは讀んだ。「『眺めよ、然らば汝は見出すべし』と書いてあつて、それから下に暖爐飾の瓦の繪があつて、その下にかう書いてありますの。『賢き者には一言にて充分なり』とね」

リード夫人はその紙を取つた。手は慄へて、顏は少し蒼くなつた。

「アリスさん。これは次の室の古い煉瓦の暖爐飾の繪ですよ。これに何か謎があるのですね、どういふ意味でせう」

「さうですね」とアリスが言つた。「この暖爐飾の瓦の上には括弧がしてありますのよ」

アリスは直ぐ起上つて、次の室に飛んで行つた。リード夫人は茫然してゐた。

アリスは暖爐飾の瓦を急いで調べて、「まあ、奥様、入らしつて下さい。茲に同じ言葉を書きつけてある瓦がございます」

リード夫人は次の室に急いだ。未だ室に入るか入らない時に、その瓦が爐の側へ落ちて、片々に碎けた。

三

「まあどうしませう、どうしませう」とアリスが叫んだ。「奥様、とんでもない事をしました。瓦を壞しまして」

「どうして、まあ、アリスさん。弛んでゐたのですか」

「え、さうですの」とアリスが答へた。「手で觸ると、少し動くやうですの。鋏を持つてゐましたので、好奇心から、瓦と瓦との間にその尖を入れて見たのです」

「かまひませんよ」とリード夫人は親切に、アリスが當惑してゐる様子を見て、「瓦を入れ換へさせませう。どれどんなに」

二人がその瓦を拾ひ上げやうとして屈んだ時に、アリスはその瓦のあつた處の後に窪みがあつて、黑づんだ白いものゝあるのに氣がついた。

「奥様、こゝに何かありますよ、括つた袋のやうなものが。取出して見ませうか」

リード夫人は眞蒼になつた。「えゝ」と言つたが、心には若しやと思ふ望が浮ぶ。

アリスが穴に手を入れて、袋を引出さうとすると、それが朽ちてゐて、あら不思儀や、澤山の金貨が爐の側に落ちて、四方に轉がつた。

「良人のお金」とリード夫人は倒れさうなのを漸くアリスにもたれて叫んだ。

アリスは狂人のやうに騒ぎ廻つた。「まあ、善い事ね、善い事ね、奥様はこれから欲しいものは何でも買へますのね。もう貧乏てないのね」

リード夫人の方はあまり吃驚してアリスの言ふことが耳に入らないほどであつた。突然に來たこの好運を信ずることが出來なかつた。

母親らしい柔しさを持つて、アリスを抱へて、「まあ、好い兒ね。あなたがゐなかつたら。これを知らなかつたてせう」

「それから奥様が私に仕事箱を下さらなければ、誰もこれを見付けなかつたてせうね」とアリスは興奮して、「まだ何かありはしないてせうか」と附言した。

それから暖爐飾の穴を覗き込んで、アリスは吃驚したやうな顔をして飛び退いたので、リード夫人も吃驚した。

「どうしたの、アリスさん」と夫人が尋ねた。

「どうした所ですか」とアリスが叫んだ。「まあ、奥様、まだ茲に袋が澤山〳〵ありますのよ」

「まあ、眞實」とリード夫人は嗄れ聲で言つた。やがて穴に手を入れて、最初のやうに片々に落ちないやうに、氣をつけて幾袋も引出した。

アリスは火の側に洋卓を推して來た。袋を皆なそこに空けると、金貨がぴか〳〵そこに堆高くなつたので、リード夫人もアリスも今更のやうに吃驚した。

「アリスさん」とリード夫人が言つた。「これは勿體ないほどの天の

お惠ですよ。お禮の申しやうもありません。これから他人樣のためになることが出來ます」

アリスは何にも言はなかつた。心は一杯になつた。悲しさうな顔色をした。

アリスはリード夫人がこれからも自分を可愛がつて下さるだらうかと思つた。夫人は今では金持である、自分は憐れな孤兒なので、これまでのやうにこの家に歡迎されぬかも知れない。さう思ふと怖しくも悲しくなつた。

リード夫人はアリスの胸の裡が幾らか解つた。「アリスさん、歡びなさい。悲しがつてゐる時ぢやありません。さあ、手傳つて下さい、金貨を片付けませう。それから、アリスさん、今こそあなたの紙入を使ふ時よ。物が家にありさへすれば、いつか使ふ時があるから便

利だと申したてせう」と夫人は笑つた。

「さうですのね、奥様、私の紙入が御入用なら、茲にありますから、御使ひ下さい」

「え、さうです」とリード夫人は言つた。「私も新しいのが入りますね。それからあなたのを貸して下さい。それに金貨がどれ位入るてせう」

リード夫人はその紙入に金貨を一杯詰め込んだ。

「さあ」とアリスにそれを渡して、「これは今朝あなたに上げたかつたけれど、持合せなかつたクリスマスの贈物よ」

「なに、これを私に。いけません、いけません、勿體ない」とアリスが叫んだ。

「まあ、お取りなさい、アリスさん。それからお聽きなさい。お話し仕たいことがありますから。私はあなたを自分の娘にしたいのですがね。これだけお金があるのですから、二人で樂しく幸福に暮しませうよ」

「まあ、奥様と」アリスは泣き出して、「私、あなたの娘になりたいわ、これ以上幸福なことはないですもの」

忽ち小さい家では何事も變つてしまつた。リード夫人はアリスを養女にして、學校に通はせた。

古い家は内も外も新らしく塗られて、種々の新しい樂しみに、愉快に輝いて來た。母子は昔友達であつた時と同じく、いかにも仲が善かつた。これほど樂しい滿足な家族は何處にもなかつた。

ソクラテスと其住家の話

昔希臘にソクラテスといふ聖人があつた。諸方から青年が彼の教を受るために集つて來た。彼はいつも樂しさうな話をするので、聽いてゐる者は飽きることがなかつた。

ある夏彼は家を建てた。その家は大變小さくつて、どうしてその中に入れるかと思はれるほどであつた。

近所の人がそれを見て吃驚して言つた。「あなたのやうな偉い方がどうしてこんなマッチ箱のやうな家にお住ゐになるのですか」

「どうしてと言つて、何も譯はありません」とソクラテスが言つた。

「こんな小さい所だつて、眞正の友達を一杯入れたら、どんなに幸福だらうと思ひます」

ホイッチントンと猫の話

一　倫敦の都

昔リチャード・ホイッチントンといふ小さい男の兒があつた。世間では彼をジックと呼んだ。お父さんもお母さんもジックが赤坊の時に死んでしまつた。彼の世話をしてくれる人達もひどく貧乏であつた。ジックは未だ仕事の出來るほど大きくないので、大變に困つた。時には朝飯を喰はないこともあつたし、又時には晝飯を喰はないこともあつた。麵麭の皮や牛乳の一滴をもらつて嬉しがることもあつた。

ジックの住んでゐる町では、人々が能く倫敦のことを風評した。誰も倫敦に行つたことはないのだが、その大きな都にある種々の不思議な事を見て來たやうな振をしてゐた。倫敦に住んでゐる人間は皆な立派な紳士淑女で、一日中歌つたり音樂を彈いたりしてゐる。誰も働いじい思ひもしないし、誰も働きもしない。街道には金が敷いてあると言つた。

ジックはこんな話を聽いて、倫敦に行きたいと思つた。或日大きな馬車が頭に鈴をつけた八匹の馬に曳れて、この小さい町に來た。ジックはその馬車が旅舍の側に居るのを見て、これは倫敦の立派な都に行くのに相違ないと思つた。

馭者は旅舍から出て來て、出立しようとするので、ジックは走り寄つて、馬車の側を歩かせて下さいと賴んだ。馭者はジックに種々

尋ねて、彼が貧乏な子て、お父さんもお母さんもないことを知つて、その頼みを承知した。

小さい子供にとりては長い道程てあつた。ても、遂に倫敦の都に來てしまつた。彼はその不思議な光景を見るのに忙しくつて、馬車の馭者に有難うといふことも忘れた。彼は出來るだけ早く街から街へと走せ歩いて、金の敷いてある街道を見つけようと思つた。彼は嘗て金貨を見たことがある。それて澤山な品物を買へることを知つてゐたので、金の敷石の小さい片ても手に入れたら、欲しいものは何ても買へると思つた。

憐れなジックはあまり走り廻つたので、非常に疲れて最早走れなくなつた。その中に日が暮れかゝつて、どの街道にも金の代りに塵があるだけてあつた。彼は暗い隅に坐つて、泣寝りに睡つてしまつ

た。

翌朝目が醒るとひどく腹が空てゐる。食物といつては麵麭の皮すら持つてゐない。彼は金の敷石のことなど忘れてしまつて、食物のことばかり考へた。街から街へと歩き廻つたが、だん〳〵飢じくつて堪らないので、路行く人に何か喰ふ物を買ふお金を一錢下さいと頼んだ。

「働くが善い、怠け者」といふ者があつた。又見むきもしないて通り過る人もあつた。

「働きたいのだけれど」とジックが言つた。

二　臺所

遂にジックは躓つてしまつて、一歩も足が進まなくなつた。立派

な家の戸の側に坐つて、自分の生れた小さい町に歸りたいと思つた。恰度晝飯の支度をしてゐた女中がジックを見て、呼んだ。

「そこに何をしてゐるんだい、お前は。乞食の子。早く行つてしまはないと熱湯をぶつかけるよ。そしたら飛上るだらう」

恰度その時その家の主人のフィッワーレンといふ人が晝飯に家へ歸つて來た。身窄らしい小さな子が戸の側に立つてゐるのを見て、から言つた。

「小僧、お前は茲で何をしてゐるのか。お前はきつと怠け者で、仕事をしないで喰つてゆかうとするのだな」

「いゝえ、そんな事はありません」とジックが言つた。「働きたいですが、仕事がありません。この町に誰も知つた人がありませんし、もう久しく何にも喰べないですもの」

「可哀さうな小僧だな」とフィッワーレンが言つた。「まあ家に入るが善い。お前に何かさせる仕事があるだらうから」そこで彼はこの小僧に晝飯を御馳走してやつて、何か容易い仕事をさせるやうに女中に言ひ付けた。

小さいジックはこの新らしい家で大變幸福だつた。意地の惡い女中がゐなければ、尙善かつたらう。女中はいつもかう言つた。

「お前、今は私の子供だよ。だから、私の言ふことは何でも仕なくつてはいけないよ。いつも氣を利せなさい。火を起したり、灰を運んだり、皿を洗つたり、床を拭いたり、薪を持て來たりするのだよ。怠け小僧、よいかい」から言つて女中はジックの耳を捻つたり、箒の柄で彼を叩いたりした。

遂に主人の娘である小さいアリスはジックが虐待されてゐること

を見て、もつとこの子供に親切にしないと暇を出しますと女中に言つた。それからジックは餘程樂になつたが、それでも未だ何彼と苦しい想をした。

ジックの寢床は家の者の寢てゐる所から遠くはなれて、家の屋根うらてあつた。床や壁には多くの穴があつて、毎夜澤山の鼠が出て來た。ジックは鼠共に苦しめられて、どうして善いか解らなかつた。

ある日一人の紳士が靴を磨いてやつた禮に一錢くれたので、ジックはそれて猫を買ふことに決めた。その翌朝恰度猫を抱いてゆく娘に遇つた。

「その猫を一錢で私に賣つてくれませんか」とジックは言つた。

「宜しうございますとも」と娘が言つた。「賣つてあげませう。能く鼠を取りますよ」

ジックは屋根うらに猫を隱しておいて、毎日自分の食物を分けてやつた。暫しの間に猫は鼠を皆な追ひ拂つたので、ジックは毎晩ぐつすりと眠ることが出來た。

三　船の商品

それから餘程經つて、フィッツワーレンの持船が海外に出發することになつた。その船には遠い國に賣るべき貨物を積込んだ。フィッツワーレンは僕共に金儲をさせたいと思つて、客間に一同を集めて、何でも持つてゐる物を船に積込むが善いと言つた。

ジックのほか、誰も皆何か船に積んてもらふ物を持つてゐた。併しジックには金も品物もないので、臺所に居つて、來なかつた。そこて主人の娘のアリスはお父さんに言つた。

「あのジックにも何か送らせたいわ。私の財布にお金があるから、それをジックの分としてやりませうよ」

「それはいけない」とフィッツワーレンが言つた。「ジックも自分のものをやらないては」恁う言つて大きな聲でジックを呼んだ。「ジック茲へ來なさい。何を船に送るつもりだい」

「私の持つてゐるのは猫だけです、餘程前に一錢で買ひました……」

「そんなら、その猫をつれてお出で」とフィッツワーレンが言つた。

「猫をやるさ。猫だつて金にならないことはない」

ジックは涙ながらに、可愛い猫を船に持つて往つて、船長に渡した。誰もジックの妙な商品を笑つた。けれども小さいアリスはジックを氣の毒に思つて、別な猫を買ふ金をやつた。

その後女中は前よりも意地惡くなつた。ジックが猫を送つたこと

ホイッチントン猫を送る

を可笑がつて、「あの猫が賣れたら、お前を打つ棒くらゐ買へるだらうよ」と言つた。

遂にジックは女中の小言に堪へられなくなつて、生れ故郷の小さい田舍の町に歸ることに決心した。十一月一日の朝早く彼は出かけた。ホロウエーといふ場所まで來て、そこの石に腰をかけた。その石は今でも「ホイッチントンの石」と呼ばれてゐる。

休んでゐると大變悲しくなつて、これからどうしやうかと思つてゐると、遠くの方でボウ敎會の鐘が樂しさうに鳴つた。彼は耳を傾げた。その鐘の音はかう言ふやうである。

「歸れ、もう一度、ホイッチントン、
三度、倫敦の市長になれるぞ」

「さうだ、さうだ」とジックは獨語を言つた。「どんな事でも辛抱し

やう。成人になつたら、倫敦の市長になつて、立派な馬車に乘んだ。さうだ歸らう。あの婆さんの女中に打れても叩かれても、かまはない」

ジックは歸つた。幸にも女中が未だ朝飯の支度をするために下へ來ないので、彼は知らん顔をして臺所へ入つて仕事をしてゐた。

四　猫

フィヅワーレンの持船は長い航海をして、遂に海の向ふ側にある外國に着いた。その國の人民はこれまで白人を見たことがなかつた。船に積んで來た立派な品物を買ふために大勢集つて來た。船長はその國の王樣と貿易したいと思つた。間もなく王樣が宮殿に來るやうに船長に使をよこした。

船長は宮殿に行つた。美しい室に通されて、銀や金で飾つた立派な敷物に坐らせた。王樣と女王とは間近く坐られて、晝飯の時に澤山の皿が運ばれた。

彼等が喰ひ初めない先に、鼠の軍勢が出て來て、その食物を皆な喰つてしまつた。それを防ぐ暇もなかつた。船長は吃驚して、こんなに澤山鼠がゐて氣持が惡くはないですかと尋ねた。

「いや、どうも」と答へられた。「實際氣持が惡いです。この鼠を退治することが出來たら、王樣は寶物の半分やつても善いと云はれます」

船長は嬉しさに飛上つた。小さいホイッチントンが送つた猫のことを思ひ出したからである。そこで王樣に向つて、雜作なく鼠を退治ることの出來る小さい動物が船の中に居りますと言つた。

そこで今度は王樣の方が嬉しさに躍つた。その黃い頭巾が頭から

落ちたほど高く飛び上つた。

「その動物を連れて來てくれ」と王様が言つた。「お前の言ふ通りに鼠を退治たら、お前の船に金を積んでやる」

船長は猫と分れるのはいかにも悲しいやうな振をした。併し遂に猫を連れて來るために船へ行つた。王様と女王とは又晝飯をこしらへ直させた。

船長が猫を抱へて、宮殿にゆくと、恰度その時食卓に鼠が集つてゐた。猫は忽ち鼠に飛びかゝつた。そしてさんざんに鼠を荒した。床にころがつて死んでゐるものもあるし、穴へ逃げ込んだのもある。そして今度はもう出て來なかつた。

王様はこれまでこんな嬉しいことはなかつた。女王はこんな偉い働をする動物を側に連れて來て下さいと言つた。船長が「ニャン子、

ニャン子」と呼ぶと、猫はやつて來て、足にからみ付いた。彼は猫を抱きあげて、女王の許へ連れて行つた。然し女王は初め怖がつて猫に觸れなかつた。

船長は猫を撫て、「ニャン子、ニャン子、ニャン子」と呼んで見た。女王も漸く猫に觸らうとして、「ニャンキ、ニャンキ、ニャンキ」と船長の言葉の眞似をされた。船長は女王の膝の上に猫を載せてやると、猫はぐる〳〵言つて、やがて寢てしまつた。

王様はこの猫を買ずにはゐられなかつた。直ちに船の貨物を殘らず買ふ約束をして、それからこの猫のためにその他の貨物全體の十倍の金を拂はれた。

船長は大歡びであつた。王様と女王に暇乞ひをして、その翌日英國に出帆つた。

五　好運

ある朝フィッツワーレンは事務所の机の前に坐つてゐた。戸を輕く叩くものがあるので、「どなたですか」と言つた。

「私です。ユニコーン號が歸つて來ました」といふ返事である。

フィッツワーレンは急に飛び上つて、戸を開けた。見れば船長が片手に上陸券、片手に寶石箱を持つて立つてゐた。彼は嬉しさに目を上げて、この好運の舞ひ込んだことを天に感謝した。

船長は直ぐ猫の話をした。王様と女王が猫の代金として憐れなジックに送つた澤山な贈物を出して見せた。性の善いフィッツワーレンはこれを聽いて、僕共を呼んで、

「彼の子を連れてお出で、眞實の名を呼んで。ホイッチントンさんに來て下さいと言つてな」

側に居る者共はこんな澤山な贈物をあの子供一人にやらないても善いてせうと言つた。けれどもフィッツワーレンは彼等を制して、

「これは彼の子のものです。私が一錢でもやらずに置くことは出來ない」と言つた。

ジックは事務所に來るやうにと呼ばれた時に鍋を洗つてゐた。

「こんなに穢くなつてゐるし、それに私の靴には一杯大きな釘が打つてありますからな」

けれどもジックは急がされた。フィッツワーレンは彼の坐る椅子を持つて來るやうに命じた。ジックは戯弄はれるのではないかと思つた。

「私のやうなこんな小僧にからかはないても善いてせう」とジックは

言つた。「どうぞ彼方へ行つて仕事をさせて下さい」

「ホイッチントンさん」とフィッツワーレンは言つた。「戯談ではない。船長がお前さんの猫を賣つて、私の持つてゐる財産全體よりも澤山な金をその代りに持つて來ました」

恁う言つて寶石の箱を開けて、ジックにその寶を見せた。あはれなジックはどうして善いか解らなかつた。

彼は主人にその一部を取つて下さいと賴んだが、フィッツワーレンは頭を振つて、「いや、これは皆なお前さんのだ。これを善いことにお用ひなさい」と言つた。

ジックはそこでその寶石の中を奥樣と小さいアリスに贈つた。彼等はジックにお禮を言つて、その好運を大變歡んで、その財産を皆な貯めておくやうに言つた。

所がジックはその財産を皆な自分のものに仕て置くことが出來ないほど親切な心の少年であつた。船長や水夫にも、又フィッツワーレンの家の僕共にも、立派な贈物をした。あの意地の惡い女中の婆さんにも贈物をした。

それからホイッチントンは顏を洗つて、髪を縮らして、綺麗な裝をして、立派な若者となつて倫敦の街を歩くやうになつた。

それから餘程經つて、倫敦の一番立派な教會で立派な結婚式があつた。アリス孃はリチャード・ホイッチントン氏の夫人になつたのである。市長も大判事も長官も多くの富豪もその式に列した。誰も皆お目出たがつた。

リチャード・ホイッチントンは大きな商人になつて、倫敦で第一流の人物になつた。彼は倫敦市の長官になつて、三度市長に選ばれた。

英國王ヘンリー五世は彼にナイトの爵を賜つた。

彼は倫敦のニウゲートに有名な監獄を建てた。その監獄の正門のアーチに「サー」リチャード・ホイッチントンと其の猫とが石に刻んてある。その姿は三百年餘も經つた今ても倫敦に行く者には見せられる。

盲人と象の話

昔六人の盲人が毎日路傍に立つて、通行人に物を貰つてゐた。彼等は屢々象のことを聽いたが、誰も見たことはなかつた。實際盲目なので、見えるわけがない。

ある朝彼等が路傍に立つてゐると、そこを象が通るといふのてある。大きな獸が自分達の前に來たといふのて、彼等は馭者に、暫らく立留つて見せて下さいと頼んだ。

勿論盲目だから、眼ては見えない。手て觸つたら、どんな動物だか解るだらうと考へた。

先づその一人が象の横腹に手を當てた。「成程、成程」と彼は言つた。「此の獸はどんなものか能く解つた。まるで壁のやうだ」

第二の盲人が象の牙に觸つた。「やい、兄弟」と彼は言つた。「お前は間違つてゐるぞ。なんて壁のやうなことがあるものか。丸くつて滑かで尖つてゐらあ。さうさ槍に一番似てゐるな」

第三の盲人は象の鼻に觸つた。「二人とも間違つてゐるぞ」と彼は言つた。「物の解る人間なら、この象は蛇に似てゐると言ひまさあ」

第四の盲人が腕を延して、象の足の一本を握んだ。「おい、盲人つて仕方がないな、お前達は」と彼は言つた。「木のやうに丸くつて、丈が高いんだぜ」

第五の盲人は丈が高いものだから、象の耳に手が觸れた。「これあ、お前達の言ふやうなものぢやないや」と彼は言つた。「まるで大きな團

扇さな」

第六の盲人は全く目が見えないので、漸くのことで手探りに象の尾を捕へた。

「馬鹿共だな」と彼は叫んだ。「お前達はどこに目があるんだい。この象は壁のやうでも、槍のやうでも、蛇のやうでも、木のやうでも、團扇のやうでもありはしない。目の着いてゐる者なら、繩のやうだと言ふさ」

やがて象は動き出した。六人の盲人は一日中路傍に坐つて、象のことに就て議論した。誰も自分が象を知つてゐると信じた。何れも他の者が自分の説に賛成しないのを惡口した。これは盲目ばかりではない。眼明の人間でもこんな馬鹿な事を時々やるものである。

大望ある年季小僧の話

「茲から太陽までどれ位あるかい」とハーモン・リーが父に使はれてゐる年季小僧のジエームス・ウレースに言つた。無論ジエームスの無學を試して見るつもりである。

十四歳になるジエームスは輝やく利巧さうな眼を主人の息子に向けて、「知りません、ハーモンさん。どれ位あるんですか」

ジエームスが正直に熱心にかう言つたので、初めその無學を笑つてやらうと思つたハーモンは眞實の答をしないわけにはゆかなかつた。それでもこの無學の小僧に對する輕蔑の色を隱さないで、「九十

五百萬哩さ。それを知らないなんて馬鹿だな」。ジエームスは抗ひもせず、その哩數を暗誦して、記憶に留めた。

その夜仕事を終へてから、ジエームスはハーモンの使つてゐる天文學の小さい教科書を持つて、屋根部屋に登つて、蠟燭を點けた。そしてこの廣大な學問の不思議を研究しようとした。彼は熱心に一つ〳〵の事實を注意して讀んだ。町の大時計が十時を打つまで時の經つのを知らなかつた。

彼は固い寢床に横になつて、讀んだことを心に繰返した。幾時になつても、睡れなかつた。新しい不思議な事を讀んだので、心はそれに引つけられた。遂に疲れてうと〳〵したが、遊星や星や彗星や定星の夢を見た。

翌る朝小僧のジエームスは新らしい心を以て仕事場に坐つた。そ

れと同時にハーモンのやうに學校に行けないことを悲しく思つた。

「それても、あの人が睡てゐる間に、夜分勉强しよう」と小僧は獨語を言つた。

その時ハーモンが店に入つて來て、ジエームスの側へ寄つて、戯弄ふつもりて、「地球の丸さはどれくらゐあるかい、ジエームス」と言つた。

「二萬五千哩」と直ぐに答へた。

ハーモンは一寸吃驚したやうな風てあつたが、直ぐニヤ〳〵笑つた。彼は親切な子供てなくつて、大變我儘な、他人に善いことをするよりも惡いことをする子供てあつた。「お前はいつの間にそんな利巧になつたのだい。そんなら木星にはどれだけ月があるか知つてゐるだらう。言つて見ろい」

「木星には四つの月があります」とジエームスは鬪子を張り上げて言つた。

「成程、それなら木星にはどれだけ環があるかい」

「木星には環はありません。土星には環はあるけれど、木星には帶があるんてす」とジエームスが斷然と言つた。

暫くの間ハーモンは吃驚して默つてゐた。不斷馬鹿にしてゐた小僧が自分と同等な知識を持つてゐる。故意と間違へて聽いた質問を正すことが出來るとは驚かざるを得ない。

「そんな利巧になつてからどれ位經つんだい」とハーモンが皮肉を言つた。

「そんなに經ちません」とジエームスは靜に、「實は貴郎の天文學の本を讀んだんてす」

「僕の本を讀むなんてことが、お前の仕事の内かい。それよりもお前の仕事に精出したらどうだい」

「仕事を怠けるもんてすか。ハーモンさん。私は仕事を終へてから、夜分讀んだんてす。それに貴郎の本を汚しはしません」

「汚さないなんて、どうても善いさ。僕の本を讀むといふのが、惡いや。本に手を着けないやうにしてくれ」

憐れなるジエームスの心はこの待設けなかつた邪魔のために大いに弱つた。自分て本を買ふ金はないし、又本を貸してくれる者も他にはないのてある。「ハーモンさん、どうぞ、そんな事を言はずに貸して下さい。大切にしますから」

「いやだい、誰が貸すか。觸らせもするものか」と大怒りてある。

ジエームスは能くハーモンの我儘を知つてゐたので、盜んて見る

ほか仕方がないと思つた。だが、盜んて見るなどといふことは正直な彼には出來ない。一日中どうしたら天文學の書物が手に入いるかを考へた。

彼は籠の製造を習つてゐた。二年も年季を入れてゐる上に、物覺えが善いので、もうその道具を上手に一人て造へることが出來た。一日の仕事をして、夜業をしたら、本を買ふ金が得られるだらうと考へた。

主人の承諾を受けて、彼は隣の人から小仕事を頼まれることになつた。少しの間夜業をすると、天文學の本を買ふだけの金が出來た。その本を買つても、五十錢だけ殘つたので、古本の字書を買つた。毎夜その本を讀んだ。朝も明るくなると、直ぐ起きてそれを讀んだ。晝間は熱心に手て仕事をしながらも、心ては讀んだ所を暗記してゐ

た。

その頃恰度有志の人達がジェームスの住てゐた町に、徒弟圖書館を設立した。彼はその圖書館から讀みたい本を借りた。さうして此の憐れな小僧は行先偉くなる土臺を作つた。二十一歳で仕事の年が明けて、それと同時に學問上の知識を澤山に得た。

主人の息子であるハーモンの方はどうしたかといふに、鄕里の小學校を終へて、遂に專門學校に入つて、法律家になる志望であつた。商人や職工をしてゐる子供などは勿論眼中になかつた。

ハーモンはそれほど學問は好きではなかつた。唯法律家になれば、職工よりも名譽だと想つたからである。憐れな奉公人であるジェームスの如きは、心から輕蔑して會つても口もきかないほどであつた。

十八の時に、ハーモンは東部の大學に入つて、二十で卒業して文

學士の名譽ある肩書を得て、家に歸つた。ジェームスが奉公の年が明けた時に、丁度ハーモンは辯護士になつた。

ジェームスも種々な原因から、法律家にならうとした。法律上の知識を得るために、熱心に勉强した。二年たゆまず研究してから、遂に辯護士を志願した。

ジェームスは首尾よく試驗に及第した。最初に頼まれた事件は大變六ケ敷ものであつた。相手の辯護士は、彼をいつも馬鹿にした主人の息子であるハーモンであつた。

公判は開かれた。若い新參の辯護士が法廷に現はれると、皆默つて注意深く眺めた。ハーモンの口許には馬鹿にする笑が洩れたが、ジェームスはそれを見なかつた。ジェームスは先づ事件を簡單に說明した。その言葉はいかにも判然してゐた。そして席に着いて、相

手の辯護人に讓つた。

ハーモンは直ちに起立して、いかにも皮肉に「非常に學識ある兄弟がとジェームスのことを言つて、それに對する反駁を試みた。この皮肉な一言にジェームスは眼を光らしたが、やがて沈着いて注意深く聽いてゐた。ハーモンは約一時間の辯護をやつて、いかにも相手を憐れむやうな馬鹿にした笑を洩して、席に着いたので、今度はジェームスが起立した。

十分も經たない中に、ハーモンの笑顏は驚愕と狼狽へた色をし始めた。ジェームスの辯論はいかにも靜かに深い組織的な思想の人であることを示した。法理論にもいかにも巧みな上に、實際上の見解にも慣れた辯護士であることを示した。ジェームスは席に着く時に、最早これ以上述べることはないから、判決を下されたいと注意した。

それ故に辯論は終つて、判決になつたが、ジェームスの依賴者である原告の勝利に歸した。この時からジェームスの位地は堅くなつた。輕蔑されたる年季小僧は實力ある有名な辯護士になつて、才能と德義に依つて尊敬された。それから十年後にジェームスは判事に擧げられたが、ハーモンの方は第五流の辯護士として、昇進もしなかつた。

フランクリン母を訪ねる話

ベンヂャミン・フランクリンはお父さんの亡くなつた後、ボストンに住んでゐるお母さんの御機嫌伺ひにこの市へ還つた。數年家へ歸らなかつた間に、彼は見違へるほど成人〻なつた。聲變りもして堂堂とした聲調になるし、子供らしいにこやかな面には成人の逞しい色が現はれた。

フランクリンは自分の容貌がこんなに變つたので、お母さんには、愛する子の前に出ると知らず識らず母親の心臓はどき〳〵するといふ本能があれば兎に角、さもなければ自分を到底見わけることは出

來まいと思つた。

そこで彼はさういふ本能があるか無いか確めるために、全く見知らぬ他人のやうな振でお母さんを訪ねて、わが子であることを見出すかどうか試して見ようと決心した。

正月の寒い冷たい日の午後である。彼はお母さんの家の戸を叩いて、フランクリン夫人に御面會したいと言つた。内に入つて見ると、年老つた夫人が客間の火の側で裁縫をしてゐた。フランクリンは出たらめの名を言つて、奥樣が旅人を宿めて下さるといふことを聽いて來たので、一夜の宿をお願ひしたいと言つた。

夫人は蔑むやうに冷かに彼を見やつて、それは何かの間違でせう。私の所は宿屋ぢやありません。唯止むを得ず立法府の議員さん達を開期中御宿め申すだけです。今も四人の議員さんの宿をしてゐるの

て、寢床が皆塞つてゐます。「だから、御用が終つたら、もう御歸りになつた方が善いてせう」と言つて、夫人は又もや裁縫をしてゐる。

けれどもフランクリンが外套を着ながら、いかにも寒さうにぶるぶるして、寒い日てすねと言つたのて、夫人は椅子を指さして、そこてお溫りなさいと言つた。

宿客がどや〳〵と入つて來たので、これ以上の談話は妨げられた。忽ち珈琲が出されて、ペンヂャミンも御相伴にあづかつた。珈琲の後には、その當時の古い風習に從つて、林檎の皿が出て、それから煙管が出されて、一同は火の側に丸くなつて、煙草を喫しながら、面白く話した。

フランクリンほど談話の巧い人はなかつた。又この時ほど彼がその談話の才を鮮に現はしたことはなかつた。彼は堅實した品の善い

語調で、話の題目に對して種々〳〵な新しい光を置いた。その話に適當な面白さうな逸話を交ぜて、一同を笑はせた。

時間は樂しく過ぎて八時になつたので、フランクリン夫人はその時を見計つて晩餐を運んだ。夫人は臺所の事に忙しくつて、見ず知ぬ若者が珈琲の後て直ぐ家を出て行つたものとばかり思つてゐた。所がそこの食卓に他の客と一緒に坐つてゐるので、はたと當惑した。

晩餐の後て直ぐ夫人は下宿人の一人てある年長な紳士を傍に呼んて、この見知らぬ若者の無作法なことを訴へて、この家へ入り込んだ有樣などを話した。あの若者の容子にはどうも疑はしい廉があります、どうしたら出て行せることが出來ませうかと尋ねた。

老紳士はかの若者は確に教育のある人て、その容子も紳士らしいと言つた。あまり愉快な話に、時間の經つたのを知らずにゐるのだ

ちうかち、もう一度傍に呼んで、宿ることが出來ない譯を話したら善いてせうと言つた。

そこで夫人は女中に若者を呼せて、出來るだけ溫和に、家の事情を話して、あまり晩くなりますから、他に宿をお取りなさいと親切に言つた。フランクリンは決して御家に御迷惑はかけませんからと答へて、もう一度お客さま方と一服喫んでから、それから御暇いたしませと言つた。

彼は客間に歸つて、煙管に詰めて一服喫すと、口が二倍も輕くなつた。一人の紳士がその日の議案であつた中央集權の問題を持出した。

フランクリンは直ちにその問題を捕へて、新しき力ある議論で殖民地の權利を主張し、議會の勢力ある人々の名を持出して、その演

說を引いて、彼等の高尙なる辯舌を稱贊した。

こんな興味ある議論をしてゐる間に、十一時が鳴つたが、誰も話に氣を奪られて知らずにゐた。フランクリン夫人の我慢の盡きたのも無理はない。夫人は部屋に入つて來て、一同の前で、言葉靜かにフランクリンに向ひ、自分をお欺しになるやうだが、出て行つていたゞきたいものですと告げた。

フランクリンは輕く言譯をして、靜に外套と帽子を取つて、一同に鄭寧に挨拶して、門口の方へ去つた。女中は燈を持つて、フランクリン夫人と一緒に彼を送り出した。

いつの間にか怖ろしい雪の暴風になつて、街道は雪が膝まで積つてゐる。女中が鏁を外すや否や、吼ゆる風は戸を開けて、燈を消して、さつと雪が吹き込んだ。

蠟燭を點火なほすと、フランクリンは戸外の方を怨めしげに見やつて、お母さんに恁う言つた。

「奥様、あなたはこの怖しい暴風にお家から私を出てゆかせなされますか。私はこの町には初めてなので、方角も解りませんから、必然街道で倒れてしまひませう。あなたは愛心の深い方のやうですから、この暴風の夜に私を犬のやうにお家から追ひ出しなさらうとは思はれません」

「愛などと御言ひなさるな」と怒つてゐる夫人が言つた。「愛は家庭に始るものですもの。こんなに長くぐづ〳〵なすつたのは、貴郎の過失てせう。打明けて申せば、どうも貴郎の容子も爲さることも氣に入りません。私の家に入つて何か惡計でもおありてはないかと思ひます」

いよ〳〵談判が六ケ敷なりさうなので、客間から一同出て來た。一同が仲裁したので、見知らぬ若者は宿ることを許された。然し寢床がないので、客間の火の側の安樂椅子に寢むことを承知した。

下宿してゐる人達は心から若者の正直を信じてゐるやうてあつたが、フランクリン夫人はさうてなかつた。疑深い用心から、銀の匙と胡椒盒を戸棚から集めて、客間の戸に錠を下して、銀の器を自分の室に運んだ。それから男の僕に衣物を着たまゝ寢んて、物音がしたら直ぐ飛んて行つて曲者を捕まへるやうに言ひつけて、なにくれと用心してから夫人は床についたが、今夜に限つて女中を自分の室に寢せた。

フランクリン夫人は日の昇らぬ前に起きて、僕共を呼びおこして、びく〳〵しながら客間の戸を開けて見ると、若者はすや〳〵と椅子

に寢てゐるのであつた。極端な不信用から忽ち心から信用するに至ることは能くあることである。

夫人は若者を呼びさまして、朝の挨拶をして、能く寢られましたかと尋ね、それからいつも下宿人の朝餐前にする家の者の朝餐に招いた。夫人はチョコレートを入れながら、「一體貴郎は茲に初めてお出でになつたやうですが、お國は遠方ですか」と尋ねた。

「私ですか、奥様、私はフィラデルフィアの市の者です」

フィラデルフィアと言はれたので、夫人は初めて心を動したのを見たとフランクリンが其後言つた。

「フィラデルフィアですと？」と夫人は目を見張つた。「フィラデルフィアに御住みなら、私のところのベンをお存じかも知れませんね」

「誰です、奥様」

「ベン・フランクリンです。私のところのベンです。それはお母さん想ひの子ですよ」

「何ですと」とフランクリンが言つた。「あの印刷屋のベン・フランクリンが貴郎のお子さんですか。あれは私の一番の仲好でさ。あれと私とは同じ室に住つてゐますんです」

「まあ、どういたしませう」と年老いた夫人は涙ぐんだ眼を天に向けて、「ベンのお友達をこんな堅い椅子の上にお寢かし申して、自分が善い寢床に寢ましたとは」

フランクリンがどうしてお母さんに事實を打明けたか、それについては何も言つてゐない。然しこの事からして彼は自然の情愛などいふものはあるものでないと堅く信じてゐた。

家庭物語 終

大正二年七月十五日印刷
大正二年七月二十日發行

【定價金五十錢】

作者　松本赳
東京市小石川區雜司ヶ谷町百十九番地

發行者　羽仁吉一
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者　藤本兼吉
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場

不許複製

發行所　婦人之友社
東京市小石川區雜司ヶ谷町百十九番地
電話番町三六九八番
振替口座東京一一六〇〇番

改訂増補

育児法

醫學博士 加藤照麿述

赤坊が生れ落ちるとから、幼稚園に行き學校に行くやうになるまでの間の養育法を、加藤博士に伺ひまして、出來るだけ詳しく記しました此の『育兒法』は、大家の親しく講述された新しい育兒書の殆ど一冊もなき折柄、若き母親方のために是非お勸めしたい書物て御座います。

一寸した思ひ違ひや、ッイうつかりしてゐることのあるために、子供達に飛んだ不衛生的な生活をさせて置きながら、こんなに注意してゐるのに、家の子供は何故弱いのだらうと氣を揉んでゐるやうなことは、何人にてもあることて御座います。此の『育兒法』をお讀みになると、さういふ心配なしに、心丈夫に子供を育てゆくことが出來ます。

（定價金八十錢、郵稅八錢、婦人之友社發行）

赤坊を泣かせずに育てる秘訣

羽仁もと子著

赤坊は泣くもの、泣いて育つものと考へられてゐた時代は過ぎ去りました。赤坊の泣くのは、やはり泣くべき譯があつて泣くのであります。畢竟取扱ひが惡いから泣くのです。赤坊の心身の天然自然の要求をよく呑込んで、それに適ふ取扱ひをしてやりさへすれば、赤坊はいつもニコ〳〵と、滅多に泣きなどするものではありません。此の本は、乳のやり方、浴みのさせ方、着物や襁褓の注意にいたるまで、一一著者の母親としての實驗に基づき、最も進歩したる赤坊の取扱方を、解り易く問答體に記したものであります。どなたでも此の本に書いてある通りに、間違ひなく實行なさるならば、必ず赤坊を無益に泣かせることなしに、健康に快活に育てゝゆくことが出來ます。

（定價十八錢、郵稅二錢、婦人之友社發行）

女中の使ひ方

加藤常子述

女中の撰擇——小間使の目見え——禮儀作法——親との約束——仲働きにはどんなのがよいか——伎倆と給金——女中の氣風の惡くなる譯——御飯炊きのえらび方——どうして女中を監督するか——小言のいひかた——朋輩同志忠告しあふ——女中談話會——仲働きの役目——小間使の躾け——切り目〳〵の挨拶——賞罰を明かにすること——女中と洗濯——子供附きにはどんなのがよいか——險呑性の女中と暢氣な女中——子供附きの女中に言ひつけて置くこと——女中の待遇——盆暮れの手當——暇をやる時の手當——二季の宿下りと臨時の外出——新參と古參——女中の慰安——相對の用事は嚴禁——男女雇人間の規律——雇人を長くつかふ秘訣——女中の癖——女中に貯金をさせた經驗——其他數十項

（定價三十五錢、郵稅四錢、婦人之友社發行）

繪入 女中訓

羽仁もと子著

『女中訓』が出來ましてから非常な評判で御座います。初めに一冊御注文になつた或るお家から、その翌日他の二人の女中にも一冊づつ持たせて置きたいから、直ぐに送るやうにとの御注文があり、そのまた翌日は親類の方でも是非いるからと云つて五冊ほど御注文になりました。繪入で面白く分りやすく、一々女中たちをうなづかせる樣に、奉公人として入用な心得が書いてあります。

『女中の使ひ方』を奥樣がお讀みになり、『女中訓』をお女中にお讀ませになるやうに願ひます。（定價三十五錢、郵稅四錢、婦人之友社發行）

理想の生活

靜子の卷

羽仁もと子著

時事新報評——『理想の生活』靜子の卷は、當今の婦人雜誌中最も着實健全なる好讀物として定評ある『婦人之友』主幹羽仁もと子女史が先年來同誌に連載せる寓意小說を一册に纏めたるものにして、名は小說なれど、實は女史が日頃抱懷しつゝある理想生活論を小說體に綴りたるまでにて、言はゞ一種のユートピヤなり。堅き信仰の上に立てる賢き母によりて理想的に教育せられたる一處女が、良緣ありて理想の男子に嫁し、乏しき家政を整理する側、舊思想の權化ともいふべき姑に事へ、誠心誠意遂によく岩の如く頑なる姑の心を碎き、病める夫に事へては理想の看護婦となり、精神的教育家の妻としては眞に其夫の冠となり、德風延いて一家一族近親知己に及び、玆に理想的の社會を造るに至る經路を描けるもの、文情優婉、よく世路の艱難を寫し、人情の機微を穿ち、讀者をして終始一貫同情と敬慕の念を以て讀了せしむる所に著者の苦心と努力とを見る。新たに人の夫となり妻とならん人々の爲めには好箇の指針盤たるべく、已に一家を成せる人々の爲めには眞に一服の清凉劑たるべし。記者は家庭を中心として著されたる此種の著作中、近頃最も注目すべき一好著として本書を江湖に推薦するものなり。

（定價六十錢、郵稅六錢、婦人之友社發行）

羽仁もと子編

家計簿

毎年發行　定價四十錢　郵稅六錢

この家計簿を用ゐてゐると、課算超過の心配がなく、ひとりでに貯金が出來ます。

月末にも年末にも、殆ど算盤を手にすることなしに、一家の生計費の內譯までが、一目で分るやうになります。

どんなに經濟の下手な人でも、知らず〳〵一家の財政を健全にすることが出來ます。

記入の仕方は極々簡易で、普通の小遣帳と同樣、誰にでも氣樂につけられます。

羽仁もと子編

主婦日記

毎年發行　定價四十錢　郵稅六錢

主婦の用事は多端なものであります。そのゴタ〳〵した仕事を、少しも落ちなく完全に、さうして氣安く處置して行くのには、どうしてよいでせうか。

日々の獻立や買物、その外樣々の用事をば、必ず前夜に於て思ひ定め、この主婦日記に記して置いて、每日その豫定通りに仕事を運んで行くに限ると思ひます。

即ちこの日記を用ゐてゐると、いろ〳〵なる樂しみの中に、最も巧に家事の整理をなさることが出來ます。

發行所　東京雜司ヶ谷　小石川町　婦人之友社

338
190

羽仁もと子主筆

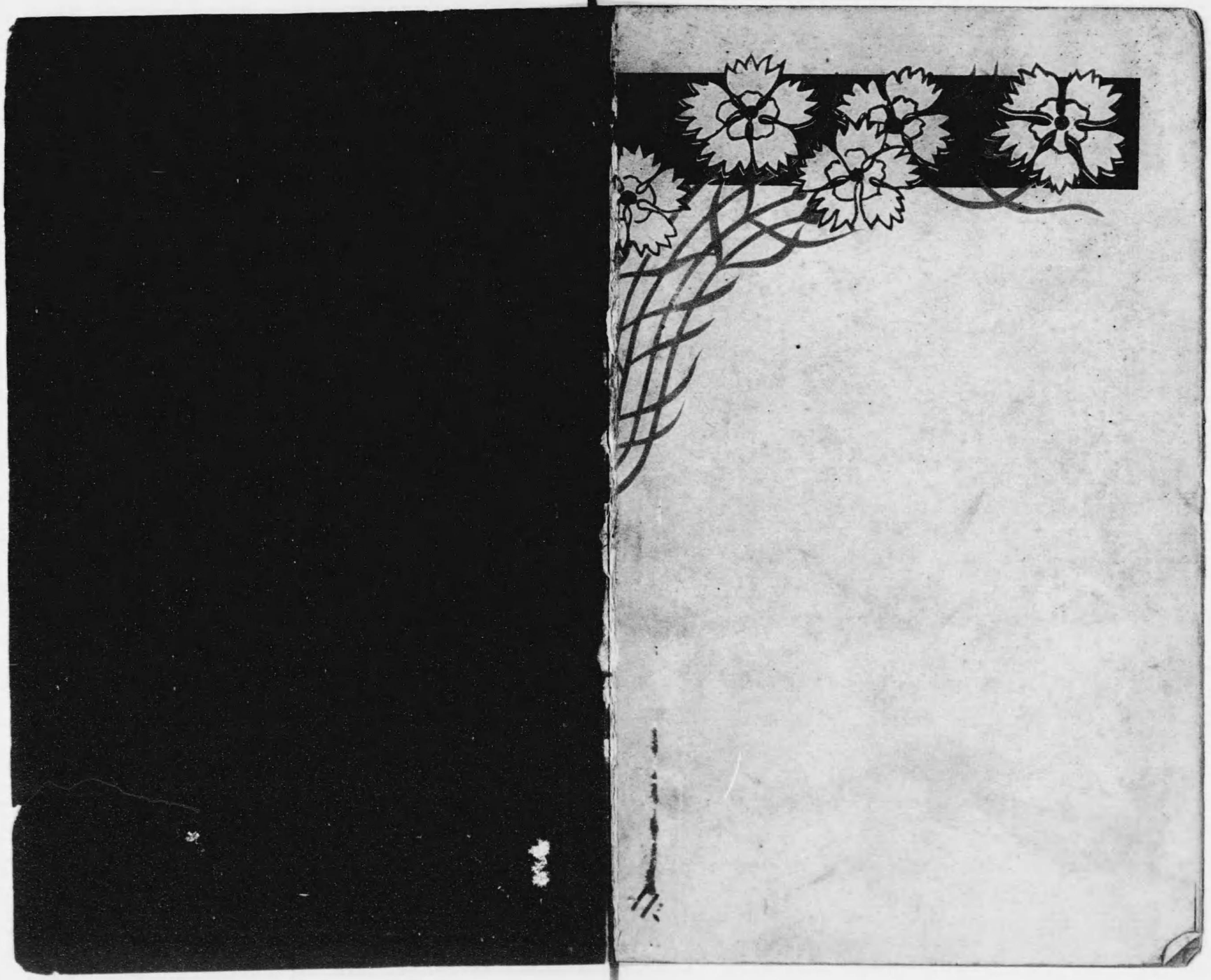
婦人之友

子供の教育、自身の修養、家の持ち方、交際の心得、服裝のことでも、住居のことでも、料理裁縫手藝のことでも、一々切實なる經驗から割り出された、さまざまの新しい思想と工夫とが、毎號の誌上に充ち溢れて居ります。

賢く、正しく、且つ幸福に世を渡り、便利にして愉快なる生活を營まんとする方々は、是非『婦人之友』をお讀み下さい。（毎月一回一日發行）

定價一冊十八錢（郵稅一錢五厘）　半年分郵稅共一圓八錢　一年分郵稅共二圓十錢

發行所　東京雜司ヶ谷小石川町　婦人之友社



238
190

終